



Vol 5

横浜市戸塚区民文化センター  
さくらプラザ 情報誌



# SAKURA

PLAZA



インタビュー

山形由美&莊村清志

SAKURA ONLY KNOWS ブランチコンサート Vol.7 ~気ままにフランス~ 安田 英主

RECOMMENDED ARTIST

エッセイ | 柳家小せん

筆の向くまま

戸塚出身の小せん師匠が、扇子をペンに持ち替えて

レポート | 駆が駆ける

誌上パックスステージツア！ 照明編 Vol.1



SAKURA  
PLAZA



# 山形由美 & 荘村清志

「フルート&ギター  
珠玉の名曲集」

豊かで美しいフルートの音色で多くのファンを魅了し続ける山形由美さんと、国内クラシックギター奏者の第一人者であり、今なお第一線で活躍する莊村清志さん。各々の演奏活動の中で20年に渡り、デュオリサイタルを重ね、演奏技術や表現を高め合ってきたお二人。その出会いから、今公演への思いまでお話を伺いました。

—デュオリサイタルはどのようなきっかけで始められたのですか?

莊村:一番最初は『連想ゲーム(NHKテレビ)』での共演でしたね。僕はゲストで呼んで頂いて、その時に「もし機会があったら、ジョイントをお願い出来ませんか?」と僕からお願いして快諾していただきました。そこから「じゃあこういう曲でこういう感じでやりましょう!」となつたと思います。

山形:そうですね、だから、ものすごい前ですよね(笑)。20年以上前でしょうか?当時は、音楽家がゲストで出るということがなかなかなかつたのですが、私は莊村さんもテレビでのギター講師の鮮烈な印象があったので「こんな大先輩が来られた!」とすごく嬉しいですね、緊張しながらご挨拶をしました(笑)。

莊村:そうですね(笑)。

山形:その後、カザルスホールでデュオリサイタルが実現したのが初共演でした。それから20年以上、各地で開かれる演奏会で数えきれないほど共演を重ねてきました。またラジオ番組の収録や私のCD録音に参加して頂いたりと、多方面でお世話になっています。

—初めて一緒に演奏された時は、お互いにどんな印象でしたか?

莊村:すごい美人じゃないですか(笑)。「とつつきにくいのかなあ」と思っていたら、すごく柔軟性がある。例えばデュオだと、「ここはこういう風にしよう」という意見があつても、変に突っぱねちゃうとかなかなかうまく行かないじゃないですか。その辺り山形さんは、意固地になることがなく、アイデアをお互いに出し合ってうまくまとめてきましたね。だから一緒にやりやすかったです。全然、気取ってないし、いつも山形さんに言ってるんですけど

やっぱり心もすごく綺麗な方で、そういう方だからこそずっと綺麗でいらっしゃるんだと思います。そういう意味でも温かみもあるしとても純粋な方なので、だからこそ美形を維持していらっしゃると思います。

山形:莊村さん、ほめすぎです(笑)。

莊村:(笑)。一人と違って二人とか三人になるとお互いの意見がうまく合わないと、やっぱりギクシャクしちゃいますけど、山形さんのアイデアも素晴らしいし、それからこちらが言ったことももちろん理解してくださるので、今でもお互いにうまくわかり合ってアンサンブルが出来ます。

—山形さんはいかがでしょうか?

山形:私からすると大先輩でいらっしゃる、日本が世界に誇るギタリストでいらっしゃるんですけども、本当にやさしくて、心が広く、器の大きい方です。音楽の面においても、今おっしゃってくださったようにアンサンブルでは「どういう風に作っていくか?」ということがとても大切なことです。音を交わすだけでなく、言葉を介して決めていくこともあります。色々な形を練習で作っていって



本番になるとお互いに別なやりたいことが出てくるのですが私がちょっと違う風に吹いたら、それをバッと返してくださいって、またそれに刺激されて音を返すのがすごく楽しいですよね。私の意見も聞いてくださいし、色々な観点から示してくださいので、同じ曲もやるたびに新しい形で作れているというのが、音楽家としてすごく喜びを感じます。

—お互いに良い影響を与えあいながら、コンサートを重ねてきたのですね。

山形:そうですね。莊村さんとのコンサートは本当に後味が良いです。音楽的なことはもちろんのこと、素晴らしい人間性に触れ、いつも頭が下がる思いです。莊村さんの持つ世界を私も感じ、一緒にステージで持つことのできた時間というのがとても貴重だなと思っています。

莊村:ありがとうございます(笑)。

—お二人で練習をされることも多いのでしょうか?

莊村:そうですね。リハーサルは綿密にやりすぎちゃうと全体が分からなくなっちゃうので、演奏会の前は、大体1日ぐらいです。かなり難しい新曲の場合は「もう1回やりましょう」っていうこともあります。

山形:ある程度、決めない部分を残しておかないと、やはりいいいきした音楽にならないような気がします。フルートとギターというのはとても近くで演奏するんですよ。舞台の中心から左右対称に位置しますから、お互いの呼吸や間合いをものすごく感じ取りやすいんですね。ですから即興的な要素のある音楽も作れますし、それもすごく楽しむ一つですね。

—お二人の息があついていないとなかなか出来ませんね。プログラムはどんな風に決めていらっしゃるのでしょうか?

莊村:お互いに「こういう曲がいいんじゃない?」とアイデアを出し合います。山形さんもプログラムに対してすごく積極的で、必ず「何曲か新しい曲をやりましょう!」という場合が結構多いです(笑)。それはすごくいいことだと思います。

山形:ありがとうございます(笑)。やっぱり慣れすぎるとつまらなくなってしまうので、どこかスリル感を

残しつつ、毎回、新鮮な気持ちで從来の曲にも取り組んでいく、というのが多いですね。

—では、20年以上コンサートをお二人で創り上げてきた中でお互いの変化はありましたか?

莊村:山形さんは良い方にどんどん変化している様子です。例えばピアニッシモなんかも最初の頃は割と少なかったんですけど、少し前から、本当の意味でのピアニッシモを使って聞かせどころを作ったりとか、表現方法もますます膨らんできています。生意気な言い方かもしれないけど「進化されているな」と僕は横で伴奏しながら強く感じています。

山形:ありがとうございます。莊村さんは奇跡の人のように若いんですよ。本当に、昔と全くお変わりにならなくて……

莊村:いえいえ、とんでもないです(笑)!

山形:きっと特別な遺伝子が組み込まれてる方なのではないかと(笑)。万年青年のような方でして。最初、私が「莊村先生」っていたら先生とは呼ばないでください!とおっしゃられて……。それ以来、ずっと「莊村さん」と呼ばせて頂いているんです。若いギタリストの方ともよく一緒にコンサートをされたりと音楽仲間をとても大切にしている感じです。感性も本当にフレッシュでいらっしゃるので、音楽にも充分それを反映していますし、こちらも溌剌としたものを頂くのが楽しいです。生意気ですけれど(笑)。



荘村：いえいえ。鈴木大介(Gt)さんにも「清志さん」と呼んでもらっているんですね。「先生」っていったらなんだか自分がすぐ年とっている、という感じじゃないですか。だから嫌なんですね。とにかく同じ仲間という感じでいたいんですよ(笑)。

—莊村さんは、近年、ますます指が回るようになつたとお伺いしましたが……

荘村:はい。ギターって音が小さいんですね。ただ最近特に思うんですけど、ギターの良いところというのは音が小さいからこそ魅力なんじゃないかと。若い頃はそれが分からなくて、「強いタッチで弾かなきゃ」と強迫観念のように思っていた。まあ若い頃はそれでパンパン弾いていたけれど、常に強いのは、そんなのは良くない。それがだんだん長い半ば頃に指が回りにくくなったりして、「何かをしなきゃ」と考えて、無駄な力が入りすぎてたということに気がついたんです。

例えば、左手は抑えるというより触るという感覚なんですね。それ以上は抑えてはいけない。必要以上に力を入れる必要はないですね。それは無駄な力。右手も軽く弦を振動させれば共鳴箱の中でバーンと綺麗な音が響く。弦を必要以上にひっぱたいちゃうと、いい音が出ない。あとは姿勢。出来るだけ背筋をまっすぐ伸ばして楽に弾く。そうすると指の移動も音色の変化もすごくやりやすい。全てにおいて脱力することができるまで、5年間ぐらいかかりました。今も常に気をつけてます。それを改良することによってすごく楽に指が回るようになって「大丈夫だな」と今は感じています。

—近年のスタイルには長年の研究があったのですね。山形さんはいかがですか？



山形：そうですね。現代フルートでは特に大きな音を求める傾向にあります。ホールも大型化していますし。私も銀から始まり、金、プラチナと徐々にパワーアのある楽器に持ち替えてきました。でも長年吹いてきて、大きな音だけを目指していくてもだめだとつくづく感じます。音量も音色もバリエーションが豊かであればあるほど表現の幅も広がります。あとは自分でそれをうかが大切です。もちろん曲に含まれる音楽的な要素がいちばんメインですが、他にもホールの響きや雰囲気、お客様との距離感、アンサンブルする楽器……さまざまなことがあって、その中で選択をしながら1曲1曲を作っています。若い頃はどうしても、大きな音の方へ広げていく方向性の努力っていました。フルートも息や腹筋を最大限に使うし、本当にパワーアのいる楽器ですから。でもここ数年、柔らかい音をここまで広げられるかを追求するようになりました。また技術的にも、楽器の構え方や持ち方、指の上げ方などを、試行錯誤してきましたが、最近その感覚のバランスが取れてきて、本当に生かせるようになってきました。だからこれからもこの方向で進んでいきたいと思っています。

莊村：山形さん最近ではすごく楽そうに綺麗な音で小さく吹く部分も増えて、どんどん多彩に変化されている。伴奏していても、とても面白いですね。

山形:ご一緒させていただいている間に、ギターの繊細さに合わせていく音のバランスの取り方の中で得出来たものが絶対あると思います。ギターのつまひきの瞬間の音、ふわーっとした余韻、これを消さないようにアンサンブルを作ってきたことが自分自身の訓練になっていたのかかもしれません。

—今回のプログラムの中で思い入れのある曲やエピソードはありますか？

山形：そうですね。『ドリーム・パイプNo.1』と『アマボーラ』は、デビュー25周年のCD「愛のアンソロジー」の録音で庄村さんに参加していただいて、「ドリーム～」は随分前に、庄村さんが私の尊敬する峰岸壮一(Ft)さんとご一緒に演奏されていたのを知っていて、ぜひ取り上げてみたいと思ってきました。現代の曲ですが、特殊奏法でフルートの音色を変えたり、ギターも打楽器みたいにリズムを取りたつたり、とても歯切れのいい曲なんですね。

莊村:『オブリビオン』も素晴らしい名曲で、山形さんによく一緒にやるようになったんですね。

—だんだんとお二人でのレパートリーも増えていくんですね。

山形：そうですね。あと、莊村さんのソロではなんといつても『愛のロマンス』ですよね。涙を流されるお客様もいらっしゃいますし、そして『アルハン布拉の想い出』のトレモロのところは、まさに宮殿の大噴水を思い起こさせる表現で、莊村さんはいつも簡単に演奏されているのですが、綺麗にこの音を出すのが大変難しい技術だそうです。いつも袖を見かけて直いていて素晴らしく感じています。

荘村：ありがとうございます。あと、日本の歌も名曲が一杯あるので、山形さんと話し合って、フルートとギターにあった曲は、どんどんやつていきました。

山形：世代を超えて日本の曲は喜ばれると思いま  
すし、ちょっとホッとしていただけるかなと。あとに  
ヘンデルの『ソナタ』はチェンバロとの曲ですが、  
ギターと合わせても、すごく綺麗ですね。

莊村：そうですね。チェンバロとギターって音質が似ているものですから、合うんですね。

山形：フレートは旋律楽器ですので、和音を出せる樂器と組むことがほとんどです。ピアノやハープそしてギターなどですね。ギターとの共演でいつもは、ラテンの曲をたくさん取り上げられることが多いのは、ラテンの曲をたくさん取り上げられるから。ギターでしか出せないラテンのリズム、音色感性、音楽性というものが大好きで、もし、から南米に

生まれたことがあったかもしれない(笑)。昔、パレエを習っていましたが、ラテン系の踊りが出てくるとすごくわくわくしたんです。今回戸塚で演奏する『エノニアイスの雲』『リベルタンゴ』『間奏曲』も非常にラテン的なイメージの強い曲ですので、そのあたりをお聴きいただければと思います。

—数々の名曲、とても楽しみです。最後に戸塚のお客様に一言ずつお願ひします。

山形:できたらばかりの美しいホールとお伺いして、とても楽しみにしています。バロックから日本の歌、そしてタンゴなどたくさんの名曲をご用意していますので、ぜひお誘い合わせの上ご来場ください。  
お待ちしております。

荘村：我々の音楽に対する熱い思いを一杯お届けしたいと思いますので、ぜひ楽しみにして頂きたいです。素晴らしいホールなので、ホールの味わいもしっかり楽しんで頂きたいと思います。ぜひ来てください。

—本日は、貴重なお話をありがとうございました。  
(インタビュー:佐々木愛理)

**山形由美:Yumi Yamagata (Flute)**  
東京藝術大学卒業後英國へ留学。小泉剛、サー・J・ゴルウェイらに師事。86年衝撃のデビューやソロ公演、オーケストラとの共演などを重ね、TV・ラジオでも活躍。これまでに13枚のCDを発表。05年日本でリリースされたセルフ・プロデュースCD「Luce」へヴェニツィアの光と夢へ!が大好評を博し、06年に它是両国でのデビューや20周年記念ツアーやを成功させた。これまで各地における2000回を超える精力的な演奏家活動や放送を通じてフルートに対する人々の関心を広く集め、フルート愛好者を増やした功績は大きい。08年には、ファンの熱い要望によって、86年のデビュープレゼンテーション以来シングレコードよりリリースされたCD9枚が相次いでデジタル・リマスターングによって完全復刻発売された。11年デビューや25周年を迎えてセルフ・プロデュースCD「Anthology~愛のアンソロジー~」をリリース、またアーリー出版より発の楽譜集を発売し、各地での記念コンサートは好評を博している。  
<http://www.yumi-yamagata.com/>

**莊村清志**:*Kiyoshi Shomura (Guitar)*  
9歳よりギターを始める。1963年に巨匠イエペスに認められ、翌年スペインで師事。67年と68年にはヨーロッパ各地でリサイタルを行ない、69年の日本デビューで「テクニック、音楽性とともに第一人者」と高い評価を得た。71年には北米で28歳に及ぶ公演を行い、国際的評価を不動のものにした。74年NHK教育テレビ「ギターを弾こう」に講師として出演。2007年「趣味悠久」にも再登場し日本ギタ界の第一人者として強く印象づけた。2008年ビルハオ交響楽団の定期演奏会に出演。同団とは『アランフェス協奏曲』を録音。09年にCDをリリース。日本ツアーのソリストとして同行し好評を博した。2013年12月にはCD「アルハン布拉の想い出」をリリース。2014年デビュー45周年を記念して東京にて大友直人指揮東京都交響楽団と協奏曲3曲を演奏するほか、各地でリサイタルを行なう予定。現在、東京・東洋音楽大学客員教授。



安田 英主

—前回(2013.9/30)のさくらプラザでの公演は大好評でした。もう戸塚のお客様にはおなじみの安田さんですが、演奏するにあたって心がけている事はありますか？

いつも温かい雰囲気の中で演奏させて頂き戸塚のお客様には感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございます!! ブランチコンサートでは、堅苦しいイメージのクラシック音楽をより身边に感じて頂く為に、プログラムに有名曲を入れたり、小品曲から大曲まで、また珍しい作品を紹介したりトークを交えたり服装もカジュアルに等工夫を凝らし、分かりやすく楽しんで頂けるよう心掛けてます。

—子供のころ、どんな音楽を聴いていましたか？

やはりクラシック音楽でしたね。でもこの道に進む為にあえてそういう環境にした訳ではないですよ(笑)。初めてショパンの曲に触れた小2から現在でもなおショパンの作品が好きなので、昔からよく聴いてましたね。また同じく今も変わらず好きなのがモーツアルトの交響曲40番やクライスターの愛の悲しみですね。

—18才からパリにお住まいとのことです、パリでの生活はいかがですか？

パリでの生活も6年目なので随分と慣れましたが、特にパリ国立高等音楽院在籍当初は語学の障壁は勿論、自宅のボイラーが真冬に壊れたり、その修理の為に技術者を呼んでも約束の日に来なかつたり等トラブル続きで、音楽以外の雑用に追われる日々でした。



一体何の為にパリに来たのか分からぬ時もありましたが、今ではそんな事も含め、乗り越えてこそ“留学”だと思います。同時に日本の環境は便利で無い過ぎているので、日本は恵まれているなあと痛感しています。

—パリでのおすすめの場所はありますか？

そうですね… 3つあります(笑)。

1つ目は、パリ20区のペール・ラシェーズ墓地ですね。ここは広大な敷地に、膨大な数のお墓がありますが、その中にショパンの墓もあります。パリに居る時は、ショパンの好きだった赤いバラの花を持って毎週お参りします。本当に偶然自宅の近くにこの墓地があるので通い易いです。

2つ目は、パリ6区のサン・ジェルマン・デ・プレ界隈ですね。ここはこれと言った名所っぽい所はないのですが、いわゆるパリの代名詞的観光スポットの凱旋門やエッフェル塔と言った観光客でひしめきあい賑わってる所に比べ、比較的穏やかでゆったり優雅に時が流れているので僕のお気に入りの場所です。

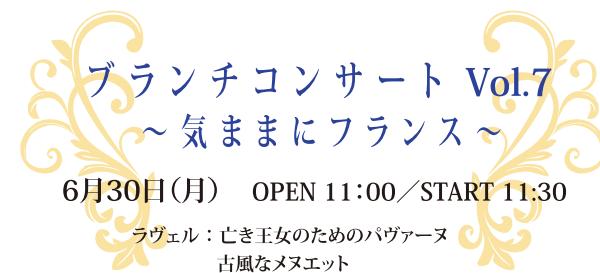
3つ目は、パリ1区のオランジュリー美術館です。ここは、かの有名なモネ作『睡蓮』の世界最大所有数を誇っており、僕がこの絵(連作)を純粋に好きだからと言うだけの理由です(笑)。パリでツアーグループとして観光ガイドのお仕事でもしようかな…?! (笑)。

—戸塚のお客様にメッセージをお願いします。

駆け出しの未熟者ですが、これからも戸塚の皆様に見守って頂き、より深く“安田英主”に親しんで頂ければ幸いです。沢山の方々にクラシック音楽を楽しんで頂けるよう様々な企画を提案し披露致しますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます!

安田英主(やすだ ひでかず)

第6回クライネフ国際ピアノコンクール、グランプリ及びクラシック作品最優秀演奏賞受賞。18歳でパリ国立高等音楽院ピアノ科首席合格(ジャック・ルヴィエ氏師事)その後、国家資格のディプロマを得る。現在パリ在住。2013年5月より3枚目となるCDを好評発売中。発売記念としてタワーレコード渋谷店にてミニライブ＆サイン会を開催。又、2014年夏4枚目のCDを発売予定。



6月30日(月) OPEN 11:00 / START 11:30

ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ  
古風なメヌエット  
フランセ：5つの若い娘たちの肖像  
ショパン：スケルツォ第3番嬰ハ短調 作品39  
別れる曲

◆ 聴きどころ

ラヴェル、フランセ、ショパン…

これらの作曲家は、各々生きた時代は違うがフランスで独自の語法を用いて活躍した。冒頭二人はフランス人であり、ショパンは父をフランス人に持つポーランド人。時代・国籍・色彩感覚は異なるが、それぞれの視点から見るフランス音楽に着目して頂きたい。

さあ、フランスの旅へ!

好評発売中

ブランチコンサート Vol.7 / Vol.8 / Vol.9

全席指定(前売 / 当日) 一般 1,000円

【お問い合わせ】

戸塚区民文化センター  
さくらプラザ 045-866-2501



# 脈拍と楽曲のテンポ(速度)の秘密



皆さんは速い曲を聴くと気持ちが高揚して、逆に遅い曲を聴くとゆったりとした気分にならることはありますか？

今回は脈拍と楽曲のテンポの秘密をご紹介します。

皆さんはご自分の脈拍数はご存じですか？成人で1分間に約70回、赤ちゃんや子供は成人の約1.5倍速いので1分間に100回以上といわれています。では、テンポの速い曲を聴くと気持ちが高揚して、逆に遅い曲を聴くとゆったりとした気分にならることはありますか？それが、脈拍と楽曲のテンポの秘密なんです。つまり、自分の脈拍より音楽が早くなると心拍数が上がりドキドキします。逆に音楽が遅くなると心拍数を落ち着かせゆったりとリラックスさせることができます。

さて、コンサートのプログラムで下記のような記載を見たことはありますか？「ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ第5番第一樂章 Allegro」この「Allegro（アレグロ）」が楽曲のテンポ（速さ）を指定するイタリア語で、「楽語」という音楽用語です。意味は「快速に・陽気に」ということで、やや早いテンポを表します。もともと表情記号だったので絶対的なテンポではなく、1分間に120～168前後と幅があり演奏者によっても変わってきますが、上記の成人平均脈拍よりは早いので、この第一樂章は高揚感を伴って聴こえるのではないかでしょう。

因みに、上記のヴァイオリン・ソナタ第5番の第二樂章は「Adagio（アダージョ）ゆるやかに」という、1分間に60～76前後の比較的遅いテンポなので、心も落ち着きゆったりとリラックスして聴けるのではないかでしょうか。

## ～主な速度標語と目安のテンポ～

●Largo (ラルゴ) ♩ = 40～60  
・・・静かにおそく

●Adagio (アダージョ) ♩ = 60～76  
・・・ゆるやかに

●Andante (アンダンテ) ♩ = 76～108  
・・・歩くような速さで

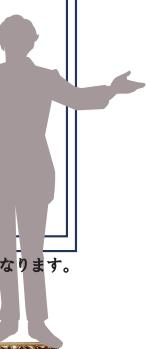
●Moderato (モデラート) ♩ = 108～120  
・・・中庸な速度で

●Allegro (アレグロ) ♩ = 120～168  
・・・快速に・陽気に

●Presto (プレスト) ♩ = 168～200  
・・・急速に

※目安となるテンポの数値は楽典によって異なります。

自分の脈拍とテンポの関連性を知ったうえで楽曲を聴くと、今までとは違った音楽の面白さを発見するかもしれませんね。  
(飯島)



芸さんはお酒をすいぶん飲むんでしょ？」  
これもお客様からよく言われる質問です。確かに、飲む機会が多いです。仕事後の打ち上げや宴会で、宴席にお招きいただきこともあります。落語には「酒飲みや醉特に若手のうちはお客様や先輩方との宴席は避けられないのですけれど、昔はともかく『強引に飲ませる』という風潮は昨今弱まっておりますし、アルコール抜きでその場を楽しむというかたちも以前よりも広く世間に認められてきているようです。

昔ながらの芸人、ベテランの師匠には「昔は全然飲めなかつたけど、無理に飲んでるうちに強くなつた」という方ももちろんいますが、全く飲めない、飲まないという大看板もいます。じゃあ、そのような人は酒の嗜をしないのかというと……むしろ下戸の師匠の方が酔払いを演じるのは上手かつたりします。不思議なようですが、自ら酔うよりも、素面で人の酔態を観察している方が演技するため得るものはない。自明の理です。

でも、でもね、心底「飲みてえな」という思いとか、飲んで「言いなあ」という気持ちとかは、実際に好きな者が語った方が伝わるんじゃないかな……ねえ。はい、私も酒呑みですのでね、日々の『勉強』をなんとか正当化したいだけなんですね。けれど。仕事がらみだけでなく、独りでも、近所の居酒屋や自宅で、ほぼ毎日飲んでしまっております。

連載 第六回  
● ● ● ● ●

あ、酒好きだと公言するど、「樂屋見舞いや差し入れに持つてこい」という催促かと思われる方もいらっしゃるかも知れませんが、お気遣い無用に願います。いや、ただけたらありがたいのですがね、重いですからねお持ちいただくのも大変ですし、複数いたして喜びもひとしおながら持つるのに一苦労、なんと言つともござりますので。

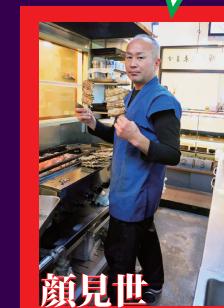
芸人に何かいただけるくらいなら、落語を聴いた後、お客様御自身が一杯やるとか美味しいものを召し上がつていただきとか、「いい一日だったな」と思える足にしていただいた方がこちらも嬉しいのです。そのためこちらも食への話題をたせばお客様が食べたいこと、酒の嗜をすれば飲みたい」と思っていただけるよう芸を磨いて参りますのね。

さあ、そのために今日も一献勉強しますかね……結局だの、たらしない呑んだくれです……。

(柳家小せん・戸塚出身 落語家)

## 男は背中で物語る 戸塚見返親仁

其之五の孫ろ姿は…  
うなぎ江戸っ子の越村さんでした！  
「やわらかくて美味しい」うなぎは、  
ツカーナモール2階の  
うなぎは戸っ子にお任せ！」



商店のご主人など、  
戸塚区内で働いているオヤジ世代の後ろ姿から、  
何処の何方だろうかと想像してみるコーナーです。  
次号では、見返りポーズで、お顔を公開します。

顔見世

柳家  
小せん

筆の向くま



# さくらプラザ



自主事業公演スケジュール

5月  
May

5/16 20:00  
若林顕  
ベートーヴェン  
ピアノ・ソナタシリーズ  
Vol.1

5/24 15:00  
黄金バッハVol.4  
小林道夫  
チエンパロ・ピアノ  
リサイタル

6月  
June

6/30 11:30  
プランチコンサートVol.7  
安田英主(Pf)  
～気ままにフランス～

7月  
July

7/11 20:00  
若林顕  
ベートーヴェン  
ピアノ・ソナタシリーズ  
Vol.2

7/28 11:30  
プランチコンサートVol.8  
小林愛実(Pf)  
～ショパンとシューマン  
2人の天才～

Coming soon!!

- 8/18 プランチコンサートVol.9 菊地 美涼(Pf) ~ドイツ音楽が奏でる夏の幻影~
- 8/30 区民感謝祭『真夏のさくらの祭典』前夜祭 ~ガールズ・ミュージック フェスティバル~
- 8/31 区民感謝祭『真夏のさくらの祭典』
- 9/19 若林顕ベートーヴェン ピアノ・ソナタシリーズ Vol.3
- 9/27 山形由美 & 荘村清志 『フルート&ギター珠玉の名曲集』
- 11/8 前橋汀子プロデュースVol.2 『弦楽四重奏を聴いてみませんか』

⋮

ご予約・お問合せは TEL: 045-866-2501

Vol.5



戸塚区民文化センター さくらプラザ

横浜市戸塚区民文化センター  
さくらプラザ 情報誌  
2014.5.1発行

〒244-0003 神奈川県横浜市戸塚区戸塚町16-17 FAX: 045-866-2502  
<http://www.totsuka.hall-info.jp> MAIL: event@totsuka.hall-info.jp